

# 通常の学級に在籍する支援を要する児童の「気付き」と早期支援

— 支援内容検討ガイドの作成と評価 —

鏡 良幸<sup>1</sup> 佐藤 慎二<sup>2</sup>

## Awareness and special support for children with difficulty in lower grade elementary school

— Creation and evaluation of teacher's guide —

KAGAMI Yoshiyuki SATOH Shinji

近年、増加傾向にある「小学校通常の学級に在籍する支援を要する児童」を早期に支援するために、小学校1～3学年を対象とする「支援内容検討ガイド」を作成した。本ガイドは通常の学級担任による実態把握及び必要に応じて支援の手掛かりを選ぶ「支援内容検討シート」と校内支援の円滑な流れを示す「校内支援体制マップ」で構成した。「支援内容検討ガイド」の妥当性について、1～3学年の担任・特別支援教育コーディネーターへのアンケート調査による評価と、あわせて事例児の担任による実践を行い、その効果について検証した。その結果、本ガイドの有用性が示された一方で、今後の活用性を高める上では「通常の学級担任への負担感」へのさらなる配慮と「多様化する児童の実態」に対応する必要性が示唆された。

キーワード：特別支援教育、通常の学級、気付き、早期支援

### 1. 研究主題について

小学校学習指導要領では「個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする」（「小学校学習指導要領総則」2017）と示している。併せて本県の第3期教育振興基本計画「施策4 共生社会の形成に向けた特別支援教育の推進」は連続した多様な学びの場の整備等が示されている。今後、小学校の通常の学級における特別支援教育の一層の充実が求められている。

近年、発達障害の可能性があり、通常の学級の中で支援を要する児童が増加傾向にある。支援を要する児童は、何らかの「困り」を有しており、本人が意識している場合以外にも将来的に教育的配慮が必要になることもある。本人が「困り」を意識している例としては視覚的に困難があり、自分から支援を求めてくる場合等が考えられる。本人が意識してい

ない例は、静かに着席し、授業を理解しているように見えるが、聴覚からの情報処理や、書字や読字の困難が考えられる。特に、後者の静かに困っている児童への気付きと校内支援体制の充実は特別支援教育の大きな課題となっている。しかし、通常の学級担任からは「支援を要する児童の早期の気付きが難しいこと」「発達障害等を起因とした児童の支援が考えにくい」等の声をよく耳にする。支援を要する児童に早期に気付いて支援する必要性は感じつつも容易でない現状がある。

そのような現状に対して、通常の学級担任が支援を要する児童に気付いた後でアセスメントシート等を活用し、支援に結びつける試みがある。筆者らが全都道府県教育委員会・センターのホームページを確認したところ、支援を要する児童に気付いた後、個別で使うアセスメントシートは千葉県を含む15道府県で開発・活用されている。また、支援を考える

1 市原市立辰巳台西小学校

2 植草学園短期大学

ためのガイドブック等を作成しているのは8府県あった。これらのアセスメントシートは、詳しく児童の実態を把握し、丁寧に支援内容を検討するという点は優れている。しかし、小貫（2021）が指摘するように、学習障害の場合には一般的な心理アセスメントの他に学力アセスメントが必要である。すなわち、静かに「困り」を抱えている児童の把握には、「通常の学級在籍児童全員」を対象にする必要があり、実際の学習場面でのつまずきを把握できるアセスメントシートが求められている。このような「通常の学級在籍児童全員」を対象とするアセスメントシートを独自に開発しているのは、東京都のみであり、MIM-PM等の既存のアセスメントシートを使っているのは2県であった。

一方で、近年、教師の多忙化が問題となり、働き方改革が進められている。さらに、特別な支援を要する児童のために授業を適応させることに負担感を感じている教師は33.9%に達している調査結果もある（2018 OECD TALIS）。

これらの現状を踏まえ、本研究では、小学校1～3学年（学齢期前半）に限定し、通常の学級担任が学級在籍児童全員を対象とするアセスメントシートの開発とそのシートを活用した校内支援体制の構築のためのガイドの作成を目的とする。それにより支援を要する児童への「気付き」から適切な支援を一連の流れで検討できるようにするものである。

## 2. 調査研究 A

### 2.1. 調査の目的

通常の学級に在籍する支援を要する児童のアセスメント方法と校内支援体制の現状について明らかにする。

### 2.2. 調査の方法

#### (1) 対象

千葉県 X 市小学校40校

特別支援教育 Co. (N=40 n=40 回収率100%)

1～3学年担任 (N=232 n=200回収率86.2%)

#### (2) 内容

質問紙による調査（多肢選択法、自由記述法）

#### (3) 期間

令和3年5月26日（水）～令和3年6月14日（月）

## 2.3. 回答結果と考察

### (1) 特別支援教育 Co.からの回答結果と考察

「特別支援教育 Co.の経験」5年未満が半数（50%）を占めていた（図1）。特別支援教育 Co.の役割の一つである校内の支援を要する児童の把握に関しては、「通常の学級の児童全員を対象としたアセスメント（観察等を含）を行っているか」との問いに「行っていない」が24名（63%）であった（図2）。「通常の学級の児童のアセスメントシートがあれば使いたい」との答えは35名（92%）から回答があった（図3）。「どのようなツールがあればよいか」の自由記述においては「デジタルで処理できるとよい」「支援の方法まで導き出されるものが良い」等の意見があり、Excelを用いて支援内容の検討が促進されるツールが現場の教師のニーズとしてあることが示唆された。

また「通常の学級の中で支援を要することに気付くきっかけ」について尋ねたところ「通常の学級担任や他教師からの相談」が39名、「保護者からの相談」が31名であり「アセスメントツール」は6名であった。（図4）

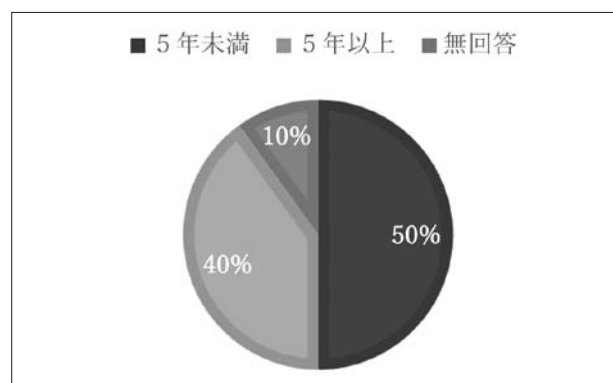


図1 特別支援教育 Co.の経験年数

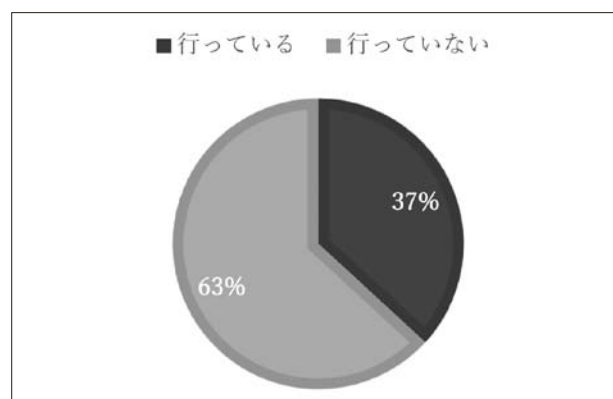


図2 通常の学級児童全員対象のアセスメント

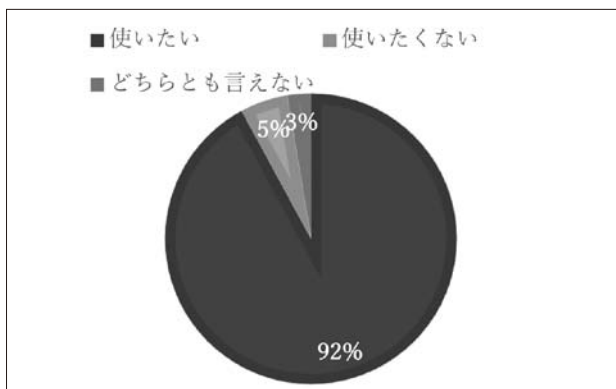


図3 アセスメントシートがあれば使いたいのか

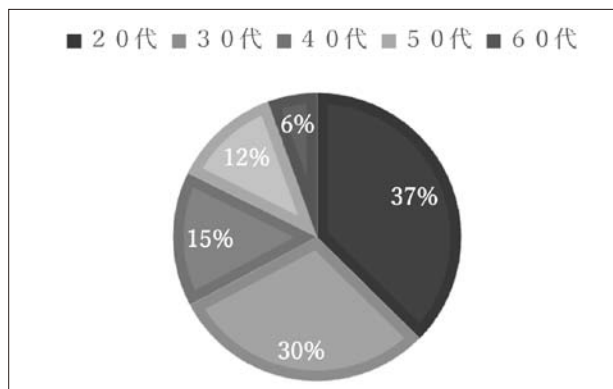


図5 通常の学級担任の年齢構成

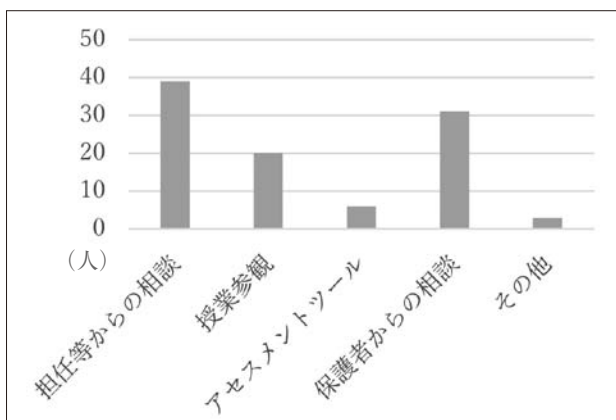


図4 支援を要する児童に気付くきっかけ

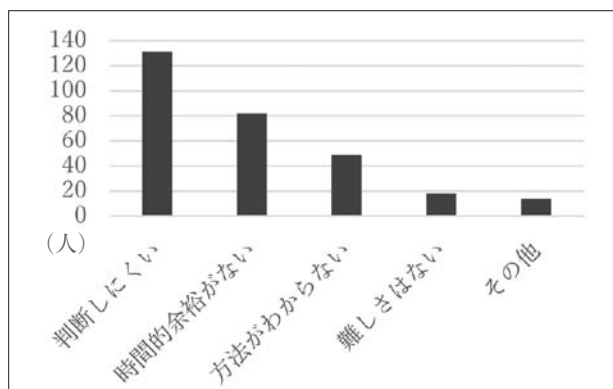


図6 実態把握で感じる難しさ

特別支援教育Co.は各校の特別支援教育の推進役であるものの、経験年数の短い教師も多く、校内の児童の実態把握を積極的に行うことは容易でないことが示された。また、積極的なアセスメント（アセスメントツールを使った気付き15%）を行うケースが少ないことから、支援を要するにもかかわらず、気付きに至らないケースが一定数存在することが推察される。

(2) 通常の学級担任の回答結果と考察

通常の学級担任の年齢構成は20代74名、30代59名、40代30名、50代24名、60代11名（無回答2名）と30代以下が3分の2（67%）を占めている。特別支援学級の経験については経験のある教師が45名（23%）であった（図5）。

担任する学級に「支援を要する児童がいるか」の問いには195名が「いる」と回答している。同時に実態把握については「支援を要しているのか、判断が難しい」が131名、「時間的余裕がない」が82名の回答があった（図6）。また、図7、8が示すように、担任による「気付き」のポイントは多岐にわた

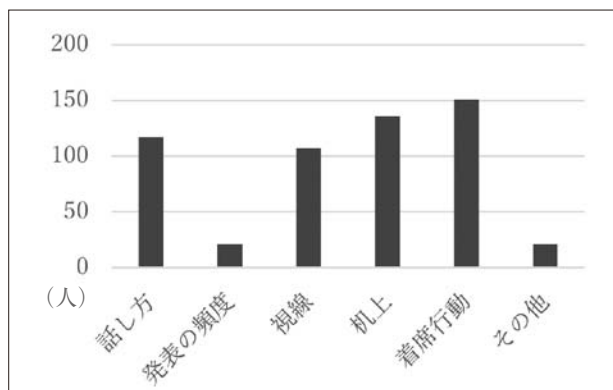


図7 児童の実態を知る授業中の視点

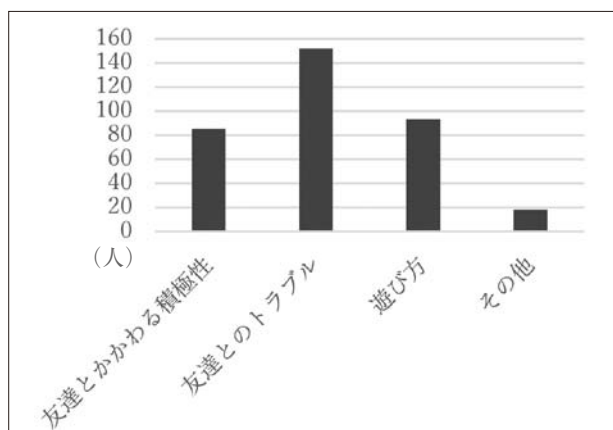


図8 児童の実態を知る授業時間以外での視点

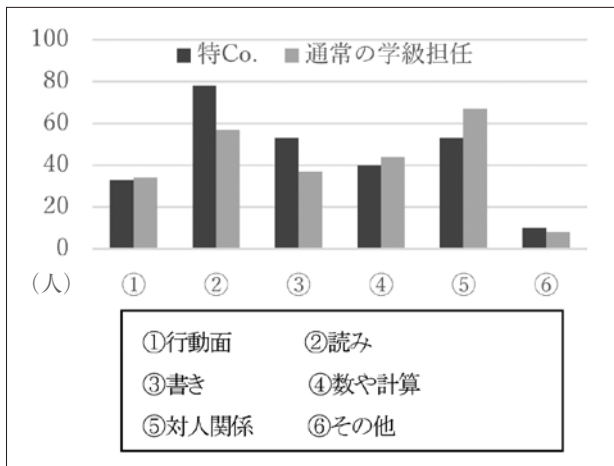


図9 気付きにくい児童（担任、特Co.比較）

ることが示された。その担任による日常の子ども理解の視点を活用することで実態把握ができるのではないかと思われた。

### (3) 特別支援教育Co.と通常の学級担任の比較考察

両者へのアンケート結果で共通する質問「支援を要していることに気付きにくいと思われる児童」について比較する（図9）と、大きな差があるのは、「読み」「書き」「対人関係」の項目であった。特別支援教育Co.は主に学習面での「困り」、学級担任は対人関係面での「困り」の把握が難しいと考えていることが示された。

気付きにくいと回答した割合は、「読み」で通常の学級担任が56%、特別支援教育Co.が78%、「書き」で通常の学級担任が37%、特別支援教育Co.が53%であった。通常の学級担任は、「読み」「書き」の困りを把握しやすく、特別支援教育Co.は逆に把握しづらいと考えていることが示唆される。特別支援教育Co.は、努力不足と誤解されやすい「読み」「書き」の困りの把握は容易ではなく、それらに「気付く」重要性を認識していると思われる。

「対人関係」については、通常の学級担任が67%、特別支援教育Co.が53%で難しさを感じている。学習面と比べ、対人関係の実態は、通常の学級担任として把握しづらいと感じている。「対人関係」における気付きのポイントをアセスメントシートに盛り込む必要性が示唆された。

## 3. 実践研究

### 3.1. 「支援内容検討ガイド」（第1版）の作成と評価

#### (1) 「支援内容検討ガイド」第1版の作成と検証

「支援内容検討シート（以下、「シート」）」と「活用のためのマニュアル」から構成される「支援内容検討ガイド（以下、「ガイド」）」を作成した。

#### ア 「シート」の中の気付きのチェック項目の選定

先行研究、調査Aの結果とDSM-5の発達障害診断基準を参考にし、26項目で構成した。DSM-5は医学的な診断のスケールであるが、「シート」は児童にどのような「困り」があるかに気付くためのものであり、診断基準を学校生活に置き換えてチェック項目を作成した（図10）。（例：DSM-5注意欠如／多動性障害のA1-a「注意を持続することが困難」→チェックリスト「授業中、離席や落ち着かない仕草が多い」セ「周りの友達と比べてよくけがをする」）

#### イ 「シート」の中の支援内容の作成

学習指導要領解説が示す障害の状態等に応じた指導内容、指導方法の工夫等を参考に、担任が支援の内容を考えるための手掛かりをプルダウンにし、検討しやすくした。（図11）

#### (2) X市T小学校での検証

「シート」（第1版）を1～3学年通常の学級担任4名に依頼した。学級人数平均22.2名で実施時間は平均67.5分だった。マニュアルについては「おおむね分かりやすい」との回答を得る。「シート」を使うことにより「支援を要する児童の把握ができた」「支援内容を考えるきっかけになった」といずれかの回答を得た。また「児童の見方が変わった」との回答もあり、「シート」の有効性は検証できた。

一方で「支援を要する児童とチェックされた児童が一致していたか」は4名全員が「一致していた」であった。実施時期にもよるが、この「シート」を使って支援を要する児童の「気付き」には結びついていないことも示唆された。チェックに時間がかかるため、効率という側面でも修正する必要がある。また支援内容を丁寧に考える場合には、支援内容の追加や校内支援体制の整備も視野に入れる必要があることが分かった。

### 3.2. 「支援内容検討ガイド」（第2版）の作成と評価（P22掲載資料1参照）

#### (1) 「支援内容検討ガイド」（第1版）からの修正

第1版の検証を踏まえて、以下の修正を行った。

#### ア 「ガイド」の改訂と内容の拡大

手順 I															
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ
出席番号	登校を渋る様子が見られる。	不安定な様子がある。	保健室に行く回数が極端に多い。	強い偏食や勝ち負け、遊び等、こだわりが強い。	ある特定の刺激(音、におい、衣服などの触覚)を嫌がる。	友達とうまく遊ぶことができないことが多い。	集団での活動が苦手、その場を離れることがある。	言葉の裏の意味を理解することが苦手である。	授業中、離席や落ち着かないしぐさが多い。	忘れ物が多かったり、自分の物の管理が難しかったりする。	テストで不注意なミスが多い。	話を聞いていないような様子が見られる。	作業を順序だてて行うことが難しい。	周りの友達と比べてよくけがをよくする。	不注意な発言、行動で友達とトラブルになることがある。
1															

図10 「支援内容検討ガイド」第1版のチェック項目の一例

席番号	困難さ	原因	個別の支援内容
1	カ	コミュニケーション	
2			教師が顔に立つて児童の気持ちなどを言語面で仲介する
3			短くわかりやすい言葉を使う(慣用語などは避ける)
4			コミュニケーションカードを準備する
			サインを決めて言葉と一緒に使えるようにする
			筆談ボードを準備する
			コミュニケーションアプリを準備する
			選択肢を準備し、意思表示がしやすいように問いかける

図11 「支援内容検討ガイド」第1版のプルダウンメニューの一例

単なるマニュアルではなく、「シート」を使ったアセスメントの意義と今後の支援の流れやシート等の役割を包括的に示すこととした。「校内支援体制マップ」「支援内容検討ガイドの使い方」とあわせて「事例の紹介」も加え、アセスメントから支援までの一連の流れを示した。

イ 「シート」の改訂

行動上の「困り」ではない、LDの傾向を含む「困り」を抱える児童により早期に気付く点を重視し、通常の学級で行われている評価をもう一度見直し、業者が作成しているテストを活用することにした。例えば、国語のテストによる集計では「話す・聞く」「読む」「書く」「総得点」(算数については「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」)で評価がA、B、Cの3段階で行われる。

これらはおおむねLDの実態把握の観点と一致していることから有効性があると考えた。「シート」ではこの観点のいずれかでC評価が出た児童をチェックすることとした。また、実施時間の短縮を目指し、その他の項目においても類似性の高いもの

はまとめ、項目を13に減らした。(第1版項目エ「強い偏食や勝ち負け、遊び等、こだわりが強い」項目オ「ある特定の刺激を嫌がる」の2項目→第2版項目エ「強いこだわりや感覚の過敏さが見られる」の1項目にまとめる等)(図12)

(2) 研究協力校2校での実践と評価

ア 実践校について

- X市G小学校(大規模校1～3学年各4クラス)
- X市T小学校(中規模校1～3学年各2クラス、未実践2クラス)

イ 実践後のアンケートから

「ガイド」(第2版)を実施後、事後アンケートは16名(88.8%)から回答を得た。マニュアルについては94%の担任から「わかりやすい」との回答を得た。実施時間については手順1が「15.3分」、手順2～4までが「17.6分」という平均時間であった。合計で32.9分であり、初期のシートから約30分短縮でき、簡便性が増し、担任の負担感が減った。また手順1により、「支援を要する児童の把握や児童の見方が変わった」、「学級集団の把握ができた」等の

手順1													手順2	手順3	手順4	
ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	出席番号	気になる項目	具体的な姿	支援のヒント
登校を遅る様子がみられる。	感情の起伏が激しい。	保健室に行く回数が増える。 (けがを除く)	強いこだわり、感覚の過敏さがみられる。	集団活動が苦手、友達とうまく遊べず独りしていることが多い。	授業中、離席や落ち着きがない、座った姿勢が崩れる等が多い。	ロッカーの中などが乱雑である。	作業課題や運動が極度に苦手である。	けがや友達とのトラブルが多い。	指示の理解やコミュニケーションがあまりしない、どちらも含む。(話を)	国語のテストの集計ソフトのいづれかの観点で「こ」がある。	算数のテストの集計ソフトのいづれかの観点で「こ」がある。	日記や作文を書くことが過度に苦手である。	出席番号	気になる項目	具体的な姿	支援のヒント
			○	○			○		○				1	エ	勝ち負けへのこだわり	指導場面で勝ち負け以外のことを称賛する
													2			
													3			
													4			
○													5	ア	自己肯定感の低下による問題	できたときに十分に称賛し、自信を持たせる
					○	○							6	カ	注意の困難さ	話をするときには注意を向けてから話をさせる
										○			7	サ	記憶の困難さ	板書や学習の補助プリントを準備する。

図12 「支援内容検討ガイド」(第2版)の中の「支援内容検討シート」

メリットがあったとの回答を15名の担任から得ることができた。手順2～4についても児童の支援が考えられた等のメリットを15名の担任が「感じた」との回答で支持を得られた。

使い方についても「支援を考えるきっかけとして」「引継ぎ資料として」等の回答を16名から得ることができ、想定していた用途で「シート」が機能することが示された。

16名の担任が記入した「シート」の分析においては「気になる行動に2つ以上のチェックが入っているにもかかわらず、支援内容が1つしか考えられていない」「支援内容がシートの中から選べない」「専門的な支援内容を選択しづらい(特別支援的な専門性を要する)」等が見られた。通常の学級担任にとってのメリットをさらに分かりやすく「ガイド」に示す必要性が指摘された。また担任一人で支援内容を考えることが難しい場合があり、複数の教師で考えるコミュニケーションツールとして、「シート」を活用する視点をガイドに入れる必要性も感じた。

### (3) 事例検討による検証と評価

#### ア 対象児について

対象児は小学校2学年男児A。テスト等から学力は平均以上。朝の支度で人よりも時間がかかってしまう様子が見られ、本児が「困り」を感じていた。担任以外の教師が聞き取りをしたところ困っていることは「ない」とのことだった。「朝の支度」について聞くと、「それは苦手」との答えだった。また、友達と遊ぶ様子があまりみられないことから確認したところ、「同年代の友達とは話が合わない。僕と話してもつまらないだろうし」「家ではEテレで高校講座(物理)を見るのが楽しい」「地球の誕生等

に興味がある」とのことだった。

#### イ 担任が見立てた支援内容

支援の方針は、通常の学級担任がシートを記入し、図12の手順3「具体的な姿」で「見通しのもちづらさ」が挙げられた。朝の支度は見通しのもちづらさからきているとの見立てだった。そこで以下の支援を行った。

○「タイマーを使いながら終わりの時間を明確に知らせる」

○「チェックリスト(手順カード)を作り、朝の支度等で活用する」

#### ウ 支援後の結果と考察

平均31.5分かかっていた朝の支度の時間が21.2分に短縮した。「シート」から「困り」を発見し、手順カードで支援を行うことにより、見通しがもちやすくなった。実践から1か月後のフォローアップでも手順カードを見て10分前後で朝の支度が終われるようになっていた。また、家庭でも「自ら、帰宅後から寝るまでのスケジュールを書いて過ごすことがあった」との保護者からの情報もあった。

今回の支援の成果として本児が自分の「困り」を意識し、他の「困り」でも自分から教師に支援を訴える機会が増えてきたことがある。例としては、「横書きよりも縦書きが読みにくい」と訴えてきたようなこと等である。

また今回のことをきっかけとして、LA通級指導教室に通うことが決定し、校内支援体制が促進されたことも大きな成果として指摘できる。

#### エ 実践後の担任への聞き取り調査結果と考察

「シート」を使うことによって児童Aの朝の支度が早くなったことに満足しているとの回答を得た。

変容が確実に見られ、「シート」の効果があったと考えたようである。要因としては、「シート」を使うことにより、今まで思いつかなかった支援の手掛かりを得られたことである。その他にも「シート」で支援の見直しをすることができそうとの評価も得られた。

オ 実践後の保護者への聞き取り調査結果と考察  
「シート」を使って担任が支援を考えたことによる効果を家庭生活の中でも実感でき、今の状況が嬉しいという以下の話を聞くことができた。

○登校後の朝の支度についてはこれまで参観した時に自分の子供だけ遅いと感じていたが、どうしていいか分からず悩んでいたのが担任の考えた支援に感謝している。

○下校した児童Aから保護者へ「先生が手順表を書いてくれて片付けがしやすくなった」等の話をよくしていたとのことだった。また、「学校が楽しい。登校したい」という発言を児童から初めて聞いたことやクラスの活動の流れに乗りながら楽しく活動できることが保護者として嬉しいとの話も聞かれた。

○他にも本人が困っていると言っていることがあるので、保護者として今後も担任と協力し、本人の支援を考えていきたいとのことだった。

#### カ まとめ

担任が「シート」を使い、対象児に対して行った支援は有効なものとして機能したと言える。今まで支援を要していても「気付く」ことができないでいた児童Aは適切な支援を受けることにより、自分の力を発揮して学校生活を送るようになった。登校を楽しむ様子がその証であろう。

「シート」の中の支援のヒントはそのまま選ぶだけでは十分な支援とは言えないが、児童との会話が生まれ、児童と共に支援を考えるきっかけとしての役割もあることが示された。

上記のような児童との個別的な対応での有用性が示唆され、今後は通級指導教室等での活動の一環としての活用も期待される。

## 4. 調査研究B

### 4.1. 調査の目的

「ガイド」(第2版)の有用性や活用の可能性につ

いて明らかにする。

### 4.2. 調査の方法

#### (1) 対象

千葉県X市小学校40校

特別支援教育Co. (N=40 n=32 回収率80%)

#### (2) 内容

Webクラウド上での質問調査(多肢選択法、自由記述法)

#### (3) 期間

令和3年11月1日(月)～令和3年11月12日(金)

### 4.3. 回答結果

#### (1) 「支援内容検討ガイド活用の手引き」の分かりやすさについて(図13)

活用のための手引きは、「シート」のマニュアルのようなものである。その分かりやすさについては「分かりやすい」が29名(90.6%)「分かりにくい」が3名(9.4%)であった。分かりにくさは、フォントの選び方に対する意見と担任が時間を削ってもやりたいと思える書き方にして欲しいという意見が記載されていた。

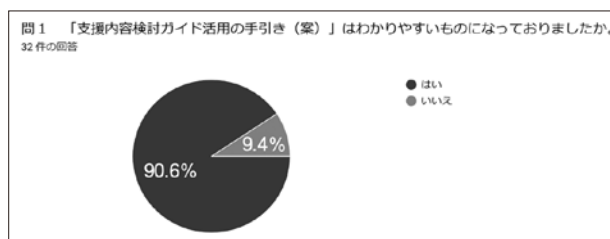


図13 手引きのわかりやすさ

#### (2) 「支援内容検討ガイド」による担任が支援を要する児童の「気付き」の促進について(図14)

「促進される」が31名(96.9%)「促進されない」が1名(3.1%)であった。「促進されない」と答えた中には「気付ける部分もあるが」という意見や「このシートがなくてもきめ細かに見ていけば『支援を要する』等と大げさに表現しなくても対応できる」という意見があった。

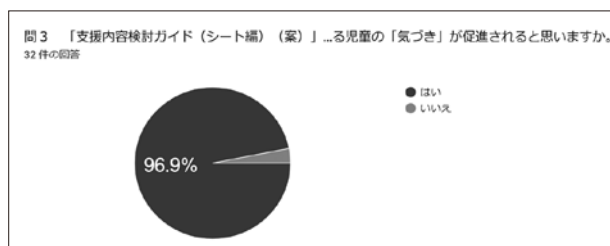


図14 「気付き」の促進について

(3) 「支援内容検討ガイド」は通常の学級担任が児童の支援を考える助けになるかについて (図15)

「助けになる」が27名 (84.4%) 「助けにならない」が5名 (15.6%) であった。「助けにならない」主な理由としては「通常の学級担任に多忙な中で記入をお願いしづらい」が60%であった。他の意見では「支援集のような冊子になった方が助けになる」「学級や児童数が多いためシート記入は難しい」という意見も挙げられた。

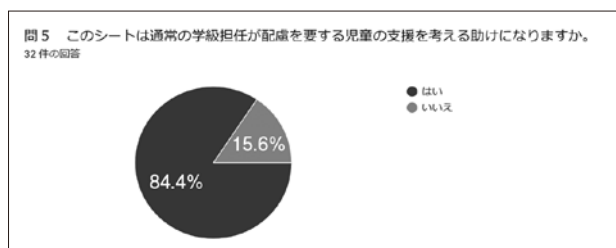


図15 支援を考える助けになるかについて

(4) 「支援内容検討ガイド」の中の「支援内容検討シート」は校内支援委員会の資料として活用できるか (図16)

「活用できる」が26名 (81.3%) 「活用できない」が6名 (18.8%) であった。「活用できない」理由としては、「実態が複雑化しており内容として十分とは言えない」「小規模校ではこのガイドを使わなくても対応できる」等の意見が出された。

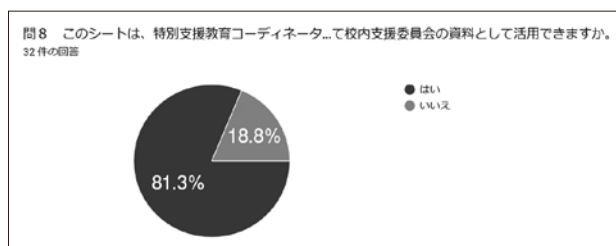


図16 校内支援委員会の資料として活用できるか

(5) 「支援内容検討ガイド」で特別支援教育の理解・啓発ができるか (図17)

「できる」が28名 (87.5%) 「できない」が4名 (12.5%) であった。「できない」理由としては「内容が十分でない」「理解・啓発にはほかの方法もあるのではないか」「このガイドの目的は児童の支援の充実にあり、理解・啓発ではないと思う」等の意見があった。一方で「支援を要していても担任や管理職が困難を抱えていない、何とかなると思っ

ている。特別支援教育という言葉に壁がある」といった意見もあった。

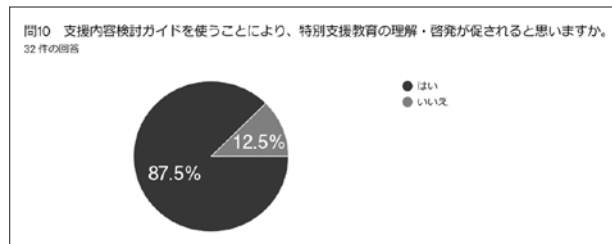


図17 理解・啓発が促されるか

(6) 自由記述から抽出

ア 肯定的な意見

- 苦労して作ったものを各学校に浸透させ、それを必要に応じて使えるようにすることが大切だと思います。すぐに活用できるように (特に管理職の理解が大切) するために、どのように広めるかを今後は考えていった方がよいと思います。
- 困りを感じている通常の学級在籍の児童の学びの場をどう考えたらいいか、いつも悩む。その判断資料があるとよいと思っていた。
- この資料があると支援会議の資料作りに時間をかけることが少なくなると思う。
- プルダウンメニューを見ることで支援のヒントは得られると思う。
- 「気になる項目」と「支援」を選択する「シート」は、担任にとって支援を考える労力を少し軽減できるのではないかと思った。

イ 改善を求める意見

- 経験の浅い担任には役立つ。様々な支援の方策があることはわかっているが、支援を実際に行っていくのは、難しいと思う。(具体的な支援方法や児童への働きかけ等) それぞれの支援方法の参考図書や資料を示すとよいと思った。
- 支援のヒントがとても参考になるのでたくさんのヒントが表示されてくるともっと使いやすいと思いました。
- とてもありがたいシステムではありますが、現在、X市例示の個別の教育支援計画を活用しているため、さらに、新しいものを作成することが増えることは負担を感じています。既存のものをなくすか、減らすか、また、改良して使っていく等の工夫が必要な気がします。



○「ガイド」の中の事例については、「文字を書かない（書けない）」原因（視機能、運動機能など）を考えながら進めるという視点も必要ではないか。原因が明らかになることで支援の内容や方法は変わってくる。

#### 4.4. 考察

「活用していきたい」という評価が高かったことも含めて「ガイド」への肯定的な評価が多かった。さらに自由記述では、「通常の学級の学びの場の判断材料になる」「支援を考える負担が軽減される」等の前向きな指摘がなされた。また、様々な改善案（「支援内容がもっと増えると使いやすい」等）が挙げられ、「ガイド」のような校内支援の指標になるものにニーズがあることを改めて示唆された。

本「ガイド」が役割を果たすためには、「通常の学級への負担感への配慮」と「多様化する実態に対応する項目の精選」を含め、今後も修正、改善を重ねる必要があると思われる。

### 5. 総合考察

研究協力2校の検証において、1～3年生16学級で通常の学級担任に使用してもらい、具体的に有益な指摘が多く示されたことで、「シート」の完成度を高めることができた。また、事例児を挙げた検証では、担任が「シート」を活用して児童の支援を考える手掛かりになる役割を果たすことを確認することができた。

児童が適切な支援を受けるためには、プルダウンによる画一的な支援では十分な対応とは言えない。しかし、「シート」を活用して担任が支援を始めたことにより、事例児は自分の「困り」に注目し、様々な支援を教師に求めるようになった。あわせて、通常の学級担任が児童の「困り」に寄り添い、児童と共に支援を考えたことで、適切な支援に繋げることができた。「シート」を使うことで、支援を要する児童との対話が生まれたことは大きな成果の一つと言えよう。

「支援内容検討ガイド」の活用により、事例に挙げた児童のようにもてる力を発揮して学校生活を送れるようになる児童が一人でも多くなっていくことを願う。そのためにも小学校における特別支援教育の一層の推進を後押しするガイドとなりうるよう、今後もさらに改訂を重ねながら普及を目指したい。

### 6. 倫理的配慮について

本研究における質問紙調査、個別面接、ビデオ検証については、事前に研究協力者に研究の趣旨を説明し、協力者の同意と許可を得て実施した。研究の趣旨や目的、研究協力者の個人情報保護、権利の保障、データの厳重な取扱い、研究成果の公表方法等を説明し、承諾を得た上で、研究に協力してもらった。また、分析結果のフィードバックを研究協力者に依頼し、修正・撤回を希望する箇所がないか確認する等配慮した。

### 謝辞

本論文の執筆に際しては、X市内の多くの先生方、Aさん及び保護者の方にご協力頂きました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

本研究成果を基にした冊子を作成・配付し、フィードバックしたいと考えています。ありがとうございました。

### 引用・参考文献及びウェブサイト

- 千葉県総合教育センター「LD児等行動兆候チェックリスト（小・中学生用）」 [https://www.ice.or.jp/nc/?page\\_id=49](https://www.ice.or.jp/nc/?page_id=49)
- 小貫 悟 (2021)『LD ADHD & ASD No.76 1月号』p.8,9 明治図書出版株式会社
- 森 則夫、杉山登志郎他 (2018)『臨床家のためのDSM-5 虎の巻』株式会社日本評論社
- 岡 耕平 (2017)「教師のための学習支援指導ガイド ver.1.3」 <http://okakohei.com>
- 佐藤慎二、大山恭子 (2020)『今日からできる！発達障害通級指導教室 子供の社会性を育てる授業のアイデアと「学習シート」274』株式会社ジアース教育新社
- 東京都教育委員会 (2017)『「よめた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント』東京都教育庁指導部特別支援教育指導課

掲載資料1 【「支援内容検討ガイド」(第2版)の一例】

## 「支援内容検討ガイド」 活用のために

### 2 このシートでできること

日々の支援の確認(必要な支援を必要な子供に!)

今後の支援を子供と一緒に考えることができる

校内委員会や引継ぎの資料としてつかえる

